東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

Exploratory Study on Introducing Role Lettering Technique for Self-identification of People with Mild Intellectural Developmental Disorders.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李, 受眞, 橋本, 創一, 尾高, 邦生, 堂山, 亞希, 杉岡, 千宏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173449

東京学芸大学教育実践研究　第16集　pp. 83-88, 2020

知的障害者の自己・他者認識に向けた ロールレタリング技法の導入に関する探索的検討

李　受眞*・橋本　創一**・尾高　邦生***・堂山　亞希****　杉岡　千宏*

（2019年11月25日受理）

LEE, S., HASHIMOTO, S., ODAKA, K., DOYAMA, A. and SUGIOKA, C.; Exploratory Study on Introducing Role Lettering Technique for Self-identification of People with Mild Intellectual Developmental Disorders.　ISSN 1349-9580

We investigated the efficacy of the role lettering technique as an assessment method for recognizing significant others with mild intellectual disabilities. The participants (N=3) wrote a letter to their mother as a significant other. A wrote a letter to herself in the future and the past. The roll lettering technique allows people with mild intellectual developmental disorders who have difficulties in taking the perspective of others to understand the feelings and requirements of others. In the future, it would be necessary to expand the scope of the sample and test the possibility of applying the role lettering technique based on the intellectual level and the degree of autism.

KEY WORDS : Intellectual Disability, Adults, Significant Others, Roll Lettering Technique

* *The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University*
** *Support Center for the Special Needs Education and Clinical Practice on Education, Tokyo Gakugei University*
*** *School of Health and Sport Science, Juntendo University*
**** *Faculty of Human Sciences, Mejiro University*

1．はじめに

「障害者学習支援推進室」が中心となって，切れ目ない支援体制の整備等に取り組んでいる（文部科学省，2017）[1]。このように，学校卒業後も生涯を通じて教育や文化，スポーツなどの様々な機会に親しむことができるよう，障害者における生涯学習の必要性について求められている。

発達期の知的障害児童生徒に比べ，青年期の知的障害者は仕事や生活により経験が豊富であり，それに伴って自己概念と他者との関わりにおいてより豊かに発達・分化していく。杉田（2013）[2] は生涯発達的観点からみて中年期の知的障害のある人の自己認識について，学齢期に知的障害を認識していたが，その後，社会との関わりのなかで，自己肯定感を積み重ね，それに伴って「障害者」という自分の枠組みに揺らぎを感じ新しい障害観，自己認識を獲得していたことを示した。

自己概念は人が自分の能力や身体的特徴など諸特性に対してもつ態度，感情や価値観などの総称であり，それは，自己の行動とその結果の自己知覚によって形成されると考えられている（大谷・小川，1996）[3]。このように，自己概念の形成には，本人の視点と同様に他者の視点が存在することが指摘されている（Bracken，1996）[4]。小島（2010）[5] によると，他者のことをより強く意識してい

* 東京学芸大学　連合学校教育学研究科
** 東京学芸大学　特別支援教育・教育臨床サポートセンター
*** 順天堂大学　スポーツ健康科学部健康学科
**** 目白大学　人間学部

る知的対象児ほど，自己についてより語ることができる。さらに，私たちは社会の中で他者とともに生活しながら自己と他者の両方に意識を向けることができる。豊田ら（2008）[6] は自己と他者の関係は児童だけでなく，青年期である大学生にとっても重要であると指摘している。

しかし，「他者」の重要性について指摘されている一方で，知的障害者が他者をどのように認識している研究は少ない。さらに，知的障害者の「自己」に関する尺度（小島，2010）[5] や発達障害者の自己理解と他者との関係性（吉井・吉松，2003 [7]；滝吉・田中，2009 [8]）については様々な論文でされているが，知的障害児によるものは見当たらない。しかし，知的障害をもつ人の自己概念の形成は，「生きる力」についての教育からも無視されてはならないとその重要性について様々な論文で述べられている（大山・今野，2002 [9]；原・内海・緒方，2002 [10]；小島，2007 [11]）。

さらに，知的障害者を対象とした自尊感情などの研究方法として，日記やロールレタリングの作成によるものがない。ロールレタリングとは，「自分自らが，自己と他者という両者の視点に立ち，役割交換を重ねながら，双方から交互に相手に手紙で伝える。この往復書簡を重ねることによって，相手の気持ちや立場を思いやるという形で，自らの内心に抱えている矛盾やジレンマに気づかせ，自己の問題解決を促進する方法」（春口，1995）[12] である。また，春口（1995）[12] は，ロールレタリングの6つの作用として，①文章による感情の明確化，②自己カウンセリングの作用，③対決と受容，④自己と他者，双方からの視点の獲得，⑤イメージ脱感作，⑥非合理的，不合理的思考への気づきをあげている。就労前の高校生と大学生を対象にロールレタリングを実施することで進路意識，自尊感情が高まり，進路不決断得点が減少することが示された（佐藤・原田・内野，2014 [13]；中嶋・山本，2007 [14]）。

一方で，平成31年2月に公示された特別支援学校高等部学習指導要領[15] に「職業」教科の指導計画の作成に当たって配慮すべき事項に関して生徒一人一人のキャリア発達を促していくことを踏まえ，発達の段階に応じて望ましい勤労観や職業観を育むとともに，自己に対する理解を深め，自らの生き方を考えて進路を主体的に選択することができるよう，将来の生き方等についても扱うなど，組織的かつ計画的に指導を行うことを挙げている。しかし，知的障害特別支援学校の高等部では軽度知的障害のある生徒が増え続けており，加えて，支援ニーズの多様性・複雑さへの対応が難しくなっている。しかし，明確な指導法は不十分であり，児童・生徒の自己と他者に対するアセスメントツールは見当たらない。就労している卒業生の声は，将来を見据えた進路指導を行うことにあたり重要であると考えられる。

これまでの研究では，知的障害者にとっての自己理解と他者の認知の重要性について指摘してきたが，測定の困難さから具体的な研究にまで至らず，自己概念と他者視点を取り入れた研究は少ない。さらに，2000年以降日本人の自尊感情の低さが指摘され，キャリア教育においても社会の中での自己の発達について強調されたカリキュラムが編成されるようになった。しかし，これまでの研究では「他者」から観察された発達・知的障害児童生徒の「自己」についての研究が多く，知的障害者自身による「他者」の視点に関する研究が著しく少ない。研究方法の限界から難しい観点であるが，「他者」の視点に置かれて考えてみることは自分の価値観が明確になり，さらには適切な職業（進路）選択や社会における個人にあった適応力を身につけることが期待できる。そうした研究方法の試行や研究そのものが求められていると考える。

2．目的

本研究は，障害者雇用で企業に就労している20代の知的障害のある者を対象に，自己と重要な他者への認識に関するアセスメント法として，ロールレタリング技法の有効性について事例から探索的に検討した。ロールレタリング技法の検討だけでなく，自尊感情と重要な他者に関する質問を実施した。ロールレタリング技法が知的障害者におけるアセスメント法として，適用可能かについて検討する。なお，本研究は東京学芸大学研究倫理委員会（受付番号：248）により審査を得た上で実施した。

3．方法

3．1　調査対象者

障害者雇用で企業に就労している20代の知的障害のある者3名（男子2名，女子1名；平均年齢25歳，SD=0歳，平均IQ59.7，SD＝4.04，以下，A，B，C）に協力を得てインタビュー調査を実施した。AとCはダウン症の診断，Bは知的発達障害の診断のみ受けている。知能指数（IQ）は，AとBがIQ62，CがIQ57であった。なお，調査対象者ならびにその保護者などの関係者すべてに，本研究の趣旨と具体的な質問内容などを説明し了解を得た上で実施した。また，論文発表において，倫理的配慮をおこなった。

3．2　手続き

対象者の行き慣れた施設の個室で構造化インタビュー調査を実施した。ロールレタリングの実施前に自尊感情尺度の項目（計9項目）を各々読み上げながら質問し，加えて質問が書いてある紙を提示した。評定法は4件法で，○×の絵（とてもそう思う…大きい○，少し思う…小さい○，あまりそう思わない…小さい×，全く思わない場合…大きい×）を机上に提示し，選択してもらった。また，「褒められて一番嬉しい人は誰ですか。その人はどんな人ですか。」と重要な他者に関する質問をした。次に，重要な他者を問う質問で指名した相手に対して手紙を書いてもらった。その後，「自分が重要な他者になったとして（重要な他者だとしたら），この手紙をもらったらどのような返事を書きますか」と尋ね，重要な他者に宛てて書いた手紙を1回読んでもらった。続いて，自分へ返信の手紙を書いてもらった。手紙を書き終わった後，重要な他者への気持ちについて尋ねた。また，事例Aに対しては，重要な他者と自分への手紙に加えて，「10年後の自分への手紙」と「10年前の自分への手紙」を書いてもらった。

3．3　調査内容

（1）重要な他者に関する質問項目

自分にとっての重要な他者を尋ねるに際して，小島（2010）[6]の質問に基づき，3個の質問項目を設けた。質問内容としては，重要な他者に対する認知と他者に対する評価を聞く質問である。具体的な教示内容は，Table 1に示す。1は重要な他者の認知と他者に対する評価を聞く質問である。重要な他者に関して聞く質問である1は，5つの選択肢（①父②母③担任教諭④恋人⑤友人）を提示した。その重要な他者に褒められた頻度と怒られた頻度を聞く質問は，「いつも」「時々」「めったに」「まったく」の4件法で評定させた。

Table1　重要な他者への認識に関する質問項目

1	本人に対して一番ほめられてうれしい人は誰ですか？
①	それはどんな人ですか。
②	どのぐらいの頻度でほめられていますか。

（2）自尊感情尺度

小島・納富（2013）[16]がRosenberg（1965）[17]の尺度を日本語訳した山本・松井・山成（1982）[18]の項目を参考に，小学校4年生から6年生でも回答でき，否定的な表現をなるべく肯定的な表現へと修正し，作成した尺度である。質問項目の中，「もっと好きになりたい」という項目のみ除いた9項目を使用した。具体的な教示内容は，Table2に示す。

Table2　自尊感情に関する質問項目

1. 自分のことが好きだ
2. 自分にはいいところがたくさんある
3. 自分は大切な人間だ
4. 他の人と同じくらい色々なことをやれる
5. 自分には自慢できることがたくさんある
6. 何をやってもうまくできない
7. いまの自分でいいと思う
8. 自分はダメな人間だと思う
9. 自分は役に立つ人間だと思う

（3）ロールレタリング

大学生を対象にキャリア教育におけるロールレタリングを試みた佐瀬（2016）[19]に基づき，事例A～Bに，①重要な他者への手紙，②重要な他者になったつもりの返信の手紙を書かせた。事例Aには，③10年前の自分への手紙，④10年後の自分への手紙を書かせた。

4．結果と考察

【事例A】

25歳の女性である。IQ62で，知的発達障害とダウン症の診断がある。自尊感情得点は18点（27点の内）であった。

Aは重要な他者について”母”であると答えた。重要な他者の人物像に対し，「優しい」「頭がいい」といった特徴について述べた。

重要な他者（母）へのお手紙（Figure1）では，普段母から言われていた言葉が書かれていた。重要な他者（母）になったつもりで自分への返信する手紙（Figure2）では，自分のことを褒めたり励ましたりするなどの言葉がみられた。Aは重要な他者の役割を演じて手紙を書くことにより自己と他者の視点が得られたと言える。

10年前の自分への手紙（Figure3）では，その時に大変だったことを思い出し，励ましの言葉をかけた。10年後の自分への手紙（Figure4）では，元気に働いているかについて問いかけ，今の自分も頑張ると書いた。

3ヶ月後，Aが手紙について読み，Aにどんな気持ちになったかについて尋ねた。Aは“母親について感謝の気持ちになれた。今の仕事も頑張ろうとしている。”と答えた。自尊感情は変化が見られなかったものの，Aの内面では様々な変化が見られた。重要な他者への手紙や，未来と過去の自分への手紙を繰り返すことで自分について見直す一つのきっかけになったと考えられる。

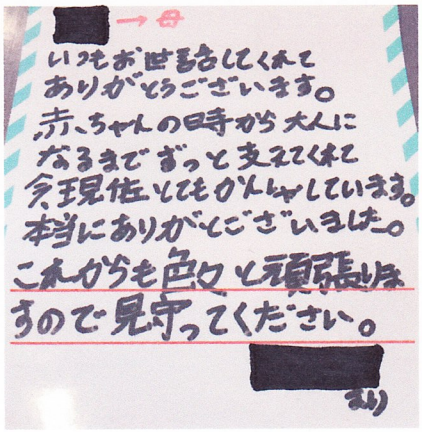

Figure1　重要な他者（母）へのお手紙

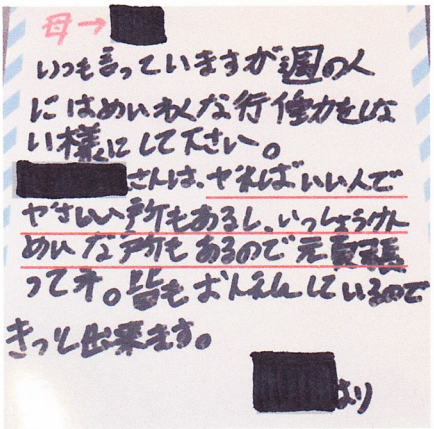

Figure2　重要な他者（母）になったつもりの返信の手紙

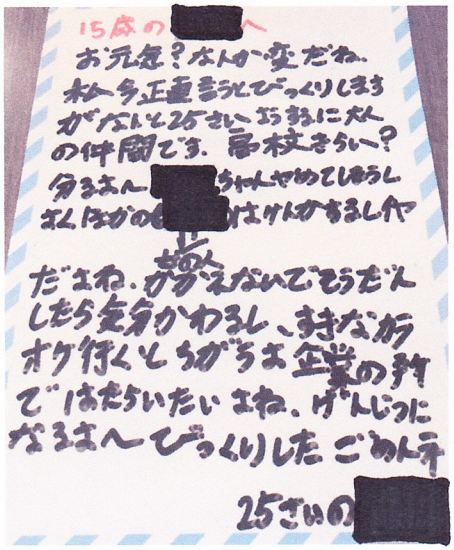

Figure3　10年前の自分への手紙

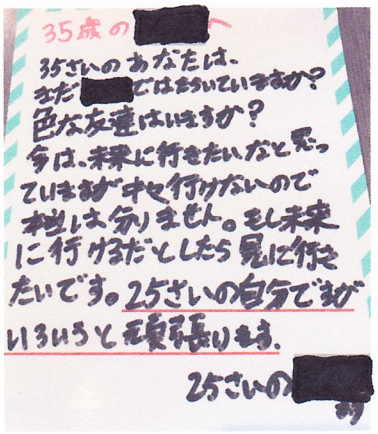

Figure4　10年後の自分への手紙

【事例B】

25歳の男性である。IQ62で，知的発達障害の診断がある。自尊感情得点は22点（27点の内）であった。

Bは重要な他者について「母」と答えた。重要な他者の人物像に対し，「優しい人でなんでも色々アドバイスをくれる。良いところは丁寧な言葉を使うところだけど，時々悪い言い方をしているところを直してほしい。」といった他者との関係性について述べた。

重要な他者（母）へのお手紙（Figure5）では，“いつもご飯作ってくれてありがとう。僕はこれから一人暮らしをするので頑張ります。たまに口癖がよくないので直してほしいです。”と書かれてあった。重要な他者（母）になったつもりでの返事（Figure6）では，“これから一人暮らしすると思うけど，ちゃんとなれたらできるから大丈夫だよ。応援しているよ。口癖は一切言わないから大丈夫。安心してね。”と自分の将来のことについて応援くれていると考えている内容が書かれてあった。ロールレタリングの実施後，Aは“母に対しありがたい気持ちになった。一人暮らしのことを応援されて嬉しい気持ちになった”と語った。

Bは重要な他者への手紙を通じて自分の将来のも目標の明確化につながったと言える。また，重要な他者の役割になることで他者の視点が得られ，自分への応援の言葉をかけることにより自己カウンセリングにつながったことが推測される。

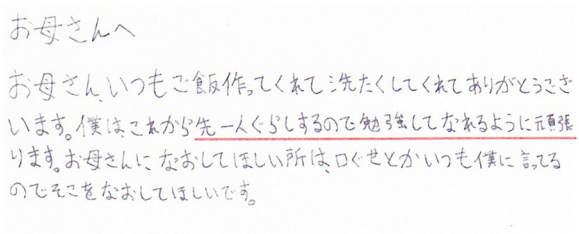

Figure5　重要な他者（母）へのお手紙

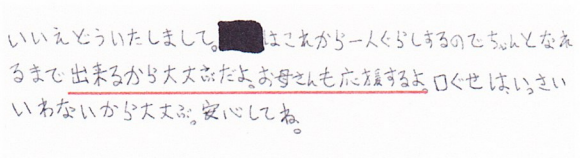
いいえどういたしまして。[redacted]はこれから一人ぐらしするのでちゃんとなれるまで出来るから大丈夫だよ。お母さんも応援するよ。ロぐせはいっぱいいわないから大丈夫。安心してね。

Figure6　重要な他者（母）になったつもりでの返信の手紙

【事例C】

25歳の男性である。IQ55で，知的発達障害とダウン症の診断がある。自尊感情得点は20点（27点の内）であった。

Cは重要な他者について“母”と答えた。重要な他者の人物像に対し，「優しい人。良いところはいつも洗濯などをしてくれる。直してほしいところはない。」といった他者との関係性について述べた。

重要な他者（母）へのお手紙（Figure7）では，“いつも洗濯物の干し方を教えてくれてありがとう。赤ちゃんから社会人までお世話になってありがとう。いつも夕飯を作ってくれてありがとう。”と書かれてあった。重要な他者（母）になったつもりでの返事（Figure8）では，“8級を受けて，うまくできて良かったですね。ありがとうは一回ぐらいにしたらいいです。夕飯はたまに作ってほしいです。”と相手の要求を推し量る内容が書かれてあった。ロールレタリングの実施後，Bは“お母さんの気持ちがわかり嬉しい”と語った。

Cは重要な他者への手紙に感謝の気持ちが書かれ，自分の感情の明確化につながったと考えられる。また，他者の視点からの手紙を書くことができ，自分を励まし，嬉しい気持ちになったことから自己カウンセリングにつながったと考えられる。

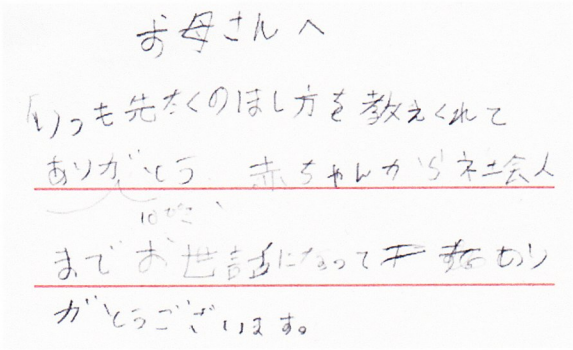
お母さんへ
いつも洗たくのほし方を教えくれて
ありがとう　赤ちゃんから社会人
までお世話になってありがとうございます。

Figure7　重要な他者（母）へのお手紙

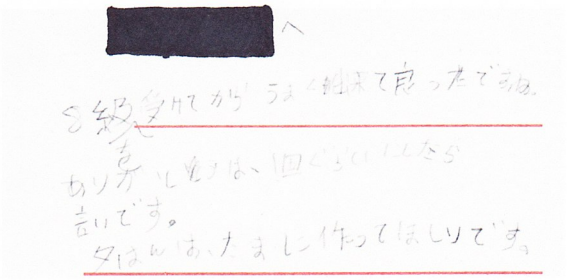
[redacted]へ
8級を受けてからうまくできて良かったですね。
ありがとうは一回ぐらいにしたらいいです。
夕はんはたまに作ってほしいです。

Figure8　重要な他者（母）になったつもりの返信の手紙

5．まとめ

軽度知的障害者を対象にロールレタリング技法の有効性について事例から探索的に検討した。ロールレタリングという技法は，「手紙を書く」という主体的行為と書きながらみることで視覚的なツールになるとも言える。知的障害者には，本研究で使用したように手紙などの視覚的なツールが自己と他者の視点を明確化させることには有効であったと考える。さらに，他者の感情や気持ちを意識していることは，重要な他者への認識や自尊感情とも深く関係している可能性がある。守屋ら（1972）[20]は，単純に他者を意識化することにとどまらない他者との対立や他者への批判は，意図や期待，考え方における自他の相違から生じるものであり，自他の固有性を明確化することと密接に関連する。

特別支援学校では，キャリア教育における進路指導にあたり，個々の児童生徒のニーズに応じてキャリアカウンセリングが求められている。このような個別のキャリアカウンセリングの中で，ロールレタリングといった技法の活用により自己についての気づきや重要な他者に対する明確化，自己カウンセリングの効果も得られるものと考えられる。キャリア教育におけるロールレタリングの位置づけについてFigure9に示す。

佐瀬（2016）[19]は就労前の大学生にロールレタリングを試すことにより，ロールレタリングが大学生によって効果的に安全なキャリア教育の１つの方法として活用できる可能性があると示した。

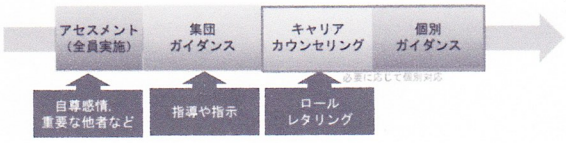

Figure9　キャリア教育における位置づけ

本研究では障害者雇用で企業に就労している20代の知的障害のある者３名を対象に自己と重要な他者への認識に関するアセスメント法としてロールレタリング技法

の有効性について探索的に検討した。その結果，他者の視点に立つことが難しいとされてきた知的障害者にとって，ロールレタリングという技法は他者の気持ちや要求などについて理解しようとする契機になったと言える。今回のインタビュー調査は3事例であったことから，今後は適用事例数を増やし，対象者の範囲を広げ，自閉症状や知的水準の程度に応じた適用の可能性について試していく必要がある。

文献

1）文部科学省：障害者の生涯学習の推進について，2017.

2）杉田穏子：中年期の知的障害のある人の自己認識の変化―生涯発達的観点からみて―，青山学院女子短期大学紀要，67，73-88，2013.

3）大谷博俊・小川巌：精神遅滞児の自己概念に関する研究―自己能力評価・社会的受容感と生活年齢・精神年齢との関連性の検討―，特殊教育学研究，34，11-19，1996.

4）Bracken, B. A.: Clinical applications of a context-dependent, multidimensional model of self-concept. In B. A. Bracken(Ed.), Handbook of self-concept. John Wiley, New York, 453-503, 1996.

5）小島道生：知的障害児の自己概念とその影響要因に関する研究―自己叙述と選択式測定法による検討―，特殊教育学研究，48，1-11，2010.

6）豊田弘司・森田泰介・岡村季光・稲森涼子：大学生における他者意識と情動知能の関係，教育実践総合センター研究紀要，29-34，2008.

7）吉井 秀樹・吉松 靖文：年長自閉性障害児の自己理解，他者理解，感情理解の関連性に関する研究，特殊教育学研究，41，217-226，2003.

8）滝吉美知香・田中真里：ある青年期アスペルガー障害者における自己理解の変容：自己理解質問および心理劇的ロールプレイングをとおして，特殊教育学研究，46，279-290，2009.

9）大山美香・今野和夫：知的障害児者の自己概念に関する研究知見と実践的課題―文献的考察を中心に―，秋田大学教育文化学部教育実践研究紀，24，53－66，2002.

10）原智彦・内海淳・緒方直彦：転換期の進路指導と肯定的な自己理解の支援―進路 学習と個別移行支援計画を中心に―，発達障害研究，24，262-271，2002.

11）小島道生：知的障害児の自己の発達と教育・支援 田中道治・都筑学・別府哲・小島道生（編）発達障害のある子どもの自己を育てる―内面世界の成長を支える教育支援―．ナカニシヤ出版，12-27，2007.

12）春口徳雄：ロールレタリング（役割交換書簡法）の理論と実際 チーム医療，1995.

13）佐藤一郎・原田純治・内野成美：高校生の進路意識に関する実践的研究～ロール・レタリングの手法を用いて～，教育実践総合センター紀要，19，191-200，2014.

14）中嶋渥・山本眞利子：「就職後の自分」を用いたロールレタリングが大学生の進路不決断と自尊感情に及ぼす影響，久留米大学心理学研究，6，75-79，2007.

15）文部科学省：特別支援学校高等部学習指導要領，2019.

16）小島道生・納富恵子：高機能広汎性発達障害児の自尊感情，自己評価，ソーシャルサポートに関する研究―通常学級に在籍する小学4年生から6年生の男児について―，LD研究，22，324-334，2013.

17）Rosenberg, M.: The self-concept: Social product and social force. In M. Rosenberg, & H. Turner (Eds.), Social psychology: Sociological perspectives. New York: Basic Books, 593-624, 1981.

18）山本真理子・松井豊・山成由紀子：認知された自己の諸側面の構造，教育心理学研究，30，64-68，1982.

19）佐瀬竜一：ロールレタリングを用いた大学生を対象にしたキャリア教育の試み，常葉大学教育学部紀要，36，201-212，2016.

20）守屋慶子・森万岐子・平崎慶明・坂上典子：児童の自己認識の発達―児童の作文の分析を通して―，教育心理学研究，20，205-215，1972.